

# 花伝書別紙口伝

八

能の善き悪き

一、抑、因果<sup>いんぐわ</sup>とて、善<sup>よ</sup>き悪<sup>あ</sup>

しき時<sup>とき</sup>の有<sup>あ</sup>るも、公案<sup>こうあん</sup>を尽<sup>つ</sup>

くして見る<sup>み</sup>に、ただ珍<sup>めづら</sup>しき

珍<sup>めづら</sup>しからぬ<sup>ふた</sup>の二つなり。

同じ<sup>をな</sup>上手<sup>ず</sup>にて、同じ<sup>をな</sup>能<sup>のう</sup>を、

昨日<sup>きのう</sup>今日<sup>けう</sup>見<sup>み</sup>れども、面白<sup>をもしろ</sup>

やと見<sup>み</sup>えつる事<sup>こと</sup>の、今<sup>いま</sup>又<sup>また</sup>

〔口訳〕

一体、「因果」といつて、善き時と悪しき時とがあるのも、公案を尽くして考へて見れば、結局、ただ、「珍らしき」と「珍らしからぬ」の二つに帰着する。

同じ上手の役者が、同じ能を演ずるのを、昨日と今日とつゞけて見て、昨日は大層面白く感じられたことが、今日は又さして面白くも感ぜられないといふことのあるのは、一寸考へると誠

面白くも無き時の有るは、  
昨日面白かりつる心馴らい  
に、今日は珍しからぬに因  
りて、悪しと見るなり。其  
の後又善き時の有るは、前  
に悪かりつるものと思う  
心、又珍しきに返りて、面

に不審なやうであるが、それは、昨日面白く感じた印象がまだ心にあつて、今日はそれを珍しく感じない為に、昨日よりも今日は出来が悪いと感じるのである。その後になつて又其の上手の能を見る場合、それが善く出来たと感じる事があるのは、以前には悪かつたといふ印象が心にある為に、今度のが又珍しく感じられるといふ工合になつて、面白く感じるのである。

白くなるなり。

されば、此の道を究め終は  
りて見れば、花とて別には  
無きものなり。奥儀を究め  
て、方に珍しき理を、我と  
知るならでは、花は有るべ  
からず。経に曰く「善悪不

以上のべた如くであるから、此の道（能の花）を究め尽してみれば、「花」といつて特別なものが別にあるのでは決してない。能芸の奥儀を極めて、「珍しき理」を万事に互つて自分自ら悟り知るのでなければ、花といふものは無いのである。経文に「\*善悪不二、邪正一如」といふ言葉がある。本来よりして、善と悪といふ区別は、如何にして定め得られよう。ただその時と場合によつて、用に足るものを以て善き

二、邪正一如」とあり。本

来より、善き悪しきとは、

何を以て、定むべきや。唯

時に因りて用足る物をば善

き物と為、用足らぬを悪し

き物と為。此の風体の品々

も、当世の衆人所々に互り

て、其の時の普き好みに因

りて取り沙汰す風体、是用

足るをめの花なるべし。此

所に此の風体を玩めば、彼

所に又余の風体を賞玩す。

是人々心々の花なり。何れ

を真と為んや。唯時に用ゆ

ものとし、用に足らぬものを以て悪しきものとするに過ぎない。能に於ける風体のしなじなも、当世の衆人に応じ所々に互つて、其の時の見物のあまねき好みに応じて、それに適せしめるやうに選び出した風体といふものが、これ即ち「用に足る」といふ為の花であるわけである。而して人の好みは区々であつて、此所に於てこの風体を賞玩するかと思ふと、彼所に於ては又他の風体を賞玩する。これ即ち、人々心々によつて、花がそれぞれに変わることを示すものである。従つて、その何れを

真とし何れを偽となし得よう。それは到底出来ることではない。ただ、時の用に足るものが即ち花であるといふ事を知るべきである。

るを以て、花と知るべし。

---

〔評〕

此の段は、前の「因果の花を知る事」を受けて、其の段に於ては、未だ解明せずして残した問題を、「珍らしき・珍らしからぬ」といふ立場から、極めて明快に説き去り、遙かに、この別紙口伝の序段の「花とは、其の時を得て珍らしきが故に、もてあそぶなり」・「たゞ花は、見る人の心に珍しきが花なり」・「花と面白きと珍らしきと、これ三つは同じ心なり」などといふ断案に相応ぜしめて居るのである。

先づ、「因果の花を知る事、きはめ也。一切皆因果なり」として、すべてを因果の理法によつて解した前段をうけて、「抑々因果とて、善き悪しき時のあるも、公案をつくして見るに、ただ珍らしきと珍らしからぬの二つ也」と断定して、時の因果の善悪も、畢竟して見れば、結局珍らしさの問題に帰着すると断じたのは誠に面白い。そして次にこれを実例を以て例証し、更に進んで、「この道を究め終りて見れば花とて別には無きもの也」といふ結論へ導いたのは、そぞろ禅僧の機鋒を思はせる峻烈さがある。

花伝書七篇は、芸能の花を伝へんが為に書かれたものである。しかも、その最後に到つて、「花などといふものは別にあるものではない」と断じ去つて、それで涼しい顔をして居るのは、誠に人を喰つた態度の如くに一見思はれる。しかし、花が無いといふ事は、他面より見れば、すべてが花であるといふに等しい。ただ花を花たらしめるものは「奥儀を究めてよろづに珍らしき理を我と知る」ことである。「善悪不二・邪正一如」といふ經典の文句を引用したのは、本来より見れば善なるもの悪なるものは無いといふ事を述べんが為である。時に當つて用に足れば

善となり、用に足らねば悪となる。それと同じく、芸能の花といふも、その芸能がその時と場合によつて、見物に珍らしく面白く感じられれば花となり、珍らしく面白い感をあたへ得なければ花とはならない。「珍らしく面白く感じる」といふ事は、言葉をかへていへば、その時に用足ることである。時と場所と人によつて、其の見物の好尚も区々である。従つて、一つの風体を花なりとして定めては、所謂琴柱に膠するたぐひであつて、変化に応ずる妙味は欠けてしまふ。それでは花が花でなくなる。従つて、すべては花であつて、すべては又花ではない。ここが善悪不二邪正一如といふ境である。

花伝書の第一篇以来、我々は世阿弥に従つて、能芸の花をさぐり求めて、多くの山河を旅して来たわけである。そして探り求めた結果は、遂に簡単な悟りにと落ちついて来た。これ所謂「到<sup>リ</sup>得<sup>テ</sup>帰<sup>リ</sup>来<sup>レバ</sup>無<sup>シ</sup>別<sup>ニ</sup>事<sup>一</sup>、廬山<sup>ハ</sup>煙雨浙江<sup>ハ</sup>潮」である。が、等しく廬山煙雨浙江潮も、未だ到らずして千万心をなやました際のそれと、一度び到得し帰来して眺め渡したそれとは、その間に大きな気持の相違がある筈である。

\*善悪不二——善悪といふも、悟得して見れば全く一如であつて、決して二つのものではなく、

邪といひ正といふも、結局分別門に迷ふ故の見解で、本来は正なるものも邪なるものもないといふ意である。仏教の方でよく言はれる語であつて、此の意義を最も徹底的に説いた経は、維摩経の入不二法門品に見える。維摩経は禪家などで尊ぶ経であるから、「経に曰く」といふのは、この維摩経をさしたものと見て良いであらう。